



2019 spring
アート特集号

Yamaha
MADE IN JAPAN
YAMAHA MOTOR CO. LTD.
YAMAHA MOTOR CO. LTD.
YAMAHA MOTOR CO. LTD.

TATSUMI ORIMOTO

KARASISISIS

SILK CUT



きになる
ひょうげん
2018

私たちがアート特集をやってみようと思ったきっかけとなった企画が、今年2月から猪苗代の「はじまりの美術館」で開催された福島県障がい者芸術作品展「きになるとひょうげん 2018」である。芸術の専門的な教育を受けているわけではない人たちの作品展に、私たちが集会所や施設で感じた「なんだこれ!」の正体があると思えたからだ。何よりタイトルがいい。「きになるとひょうげん」。私たちの感じた「心のざわめき」をこれほどの確に表した言葉はないと思った。そうだ、私たちは、気になって仕方なかったのだ。

会場の「はじまりの美術館」は、障害のある人のアートを展示する美術館として知られ、郡山市にある社会福祉法人が運営している。「きになるとひょうげん」は、福島県内に暮らす障害のある人たちの作品を展示する企画展。今年で2回目であり、個人と共同制作合わせて228組、308点の作品が一挙に展示された。

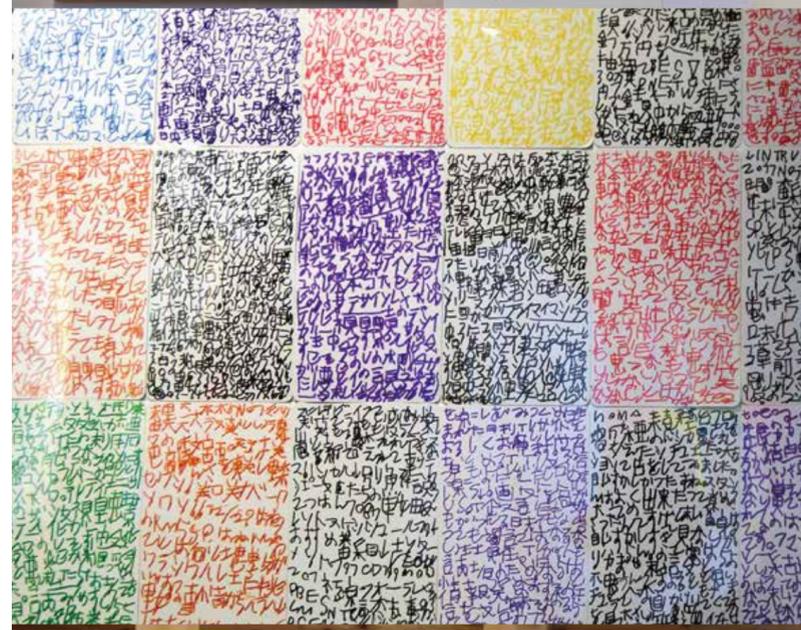
何十枚ものメモ帳に規則正しくキャラクターが描かれた作品。段ボールで作られた味のあるこけし。精巧なクラフト作品のようなものや、現代アートのようなインスタレーションもある。どの作品にも「きになる」ポイントがある。そして「きになる」という言葉の謎の力により、観覧者は「なぜきになるのか」を考えずにいられなくなってしまい、その正体を探るため、作者本人の障害や生活のことを考えるようになるのだった。

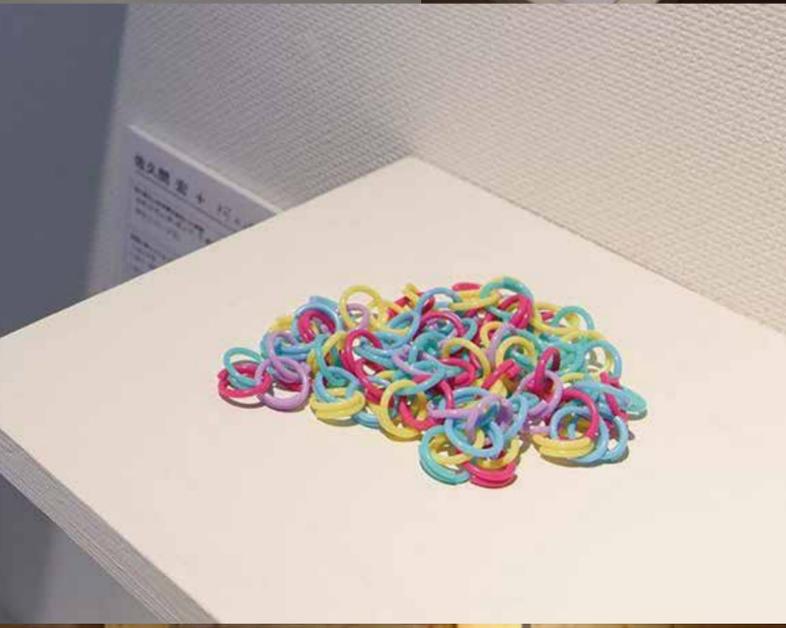
はじまりの美術館の岡部兼芳館長に話を聞く。「作品を見る人だけでなく、作者自身も何かが気になって制作したはずですし、その『きになる』が巡ってお互いのところの中の動きがいい方向に波及していくんじゃないかと考えて、それで『きになる』と『ひょうげん』の間に『と』を入れました。きになるひょうげんは、人と人の関係性によって生まれているということかもしれません。

ひとつ、きになるエピソードを聞いた。佐久間宏さんという男性と、歴代の支援員が共同で作った作品の話だった。佐久間さんは、手の感覚が敏感で1日中何かをジャラジャラと触っている。担当の支援員は、どんな風にジャラジャラを楽しんでくれるかを日々考える。ある時はチェーン、ある時はビーズ。飲み込まないように、投げても割れないように、できるだけ心地いい素材でジャラジャラを作る。本作は、つまり支援員が佐久間さんのために作った支援ツールなのだ(写真10)。

prologue

いごくでは、よく地域の集会所や老人ホームなどへ取材に行く。そういうところに行くとき必ずと言っていいほど、何かしら図画工作のような作品がどこかしこに飾られている。その多くは「リハビリ」や「レクリエーション」で制作されたものだと思いがつく。しかしごくたまに、「これ、すげえな」「これ、ヤバくてね?」と思う作品や人に出会うことがある。ものすごく手の込んだ民芸のようなもの。めっちゃエスプリの効いた川柳。なんのためにやってるのかイミフな造形。常軌を逸した、もはや狂気といつていいほどの活動。それらを目にした私たちは「窓のぼろぼろ」以外の言葉を失う。興奮し、心がざわつき、考えずにいられなくなった私たちは、今回、「窓のぼろぼろ」の正体を探るための旅に出ることにした。猪苗代、東京、そしていわき。いかにも短い旅程であり、この旅が身の丈に合っていないのも承知だ。けれど、やっぱり考えずにいられない。人が生きること、そして表現することの根源を。いごくアート特集。その旅の軌跡を、包み隠さずお伝えする。





この表現に目をつけたのが学芸員の大政愛さんだった。「支援員からしたら当たり前のものかもしれませんが、これを握って音を出してリズムに乗る佐久間さんの表現とも言えるし、支援員も佐久間さんの行動が『きになる』から生まれているものです。作品には、佐久間さんと支援員の対話の痕跡や関係性がしっかりと残されていて、これはアートだと言っていいと思います。」

ここに展示された多くの作品は、その人の「障害」から生まれている。時に「問題行動」とされることもあるのだろう。それを「問題行動」ではなく「きになるひょうげん」として捉え直してみる。すると、大政さんのように、「それもアリかも」「それってもしかしたらアートかも」と思える余白が生まれるのだった。その余白のなかに、「その人はなぜそれを作ろうとしているのか」という思考と対話が生まれる。「障害」ではなく、その人の「本来」を探ろうとする回路「 ∞ 」が立ち現れるのだ。

私たちが「なんだこれ！」を感じる時、そこには「きになる」が生まれている。それは自己の「ひょうげん」の入り口であると同時に、別の人の「ひょうげん」を通じて「その人」を理解する入り口にもなる。自分も含めただれかの「ひょうげん」を、ありようを、面白がってみよう。それもアリだと許容してみよう。「きになる」を自覚して始めて、私たちは、自分にも他者にも向けられた「 ∞ 」を歩くことができる。

「きになるひょうげん」とは、展示会のタイトルであるだけでなく、アートや対話を生み出す「おまじない」のようなものかもしれない。それをインストールされてしまった私たちは、これまで以上に「きになる」ものが増えていくのだろう。仕方がない。どれもこれも面白がっていけばいい。この社会には、「きになる」もので溢れているはずだから。

P3		P4	
1		6	7
2	3	8	9
4		10	
5		5	

- 1 | 春らしい軽やかな足元に！
～ハイヒール・靴～ 鈴木盛衛（喜多方市）
- 2 | 恋人募集中 松本秀勝（福島市）
- 3 | らず 高野大晴（田村市）
- 4 | 楽しみ 佐藤雅弘（福島市）
- 5 | おどろき 遠藤百恵（田村市）
- 6 | 新幹線・電車・バス・車 紺野貴明（福島市）
- 7 | たまごの行列 ぼたんチーム（郡山市）
- 8 | 森のバター 本田正（須賀川市）
- 9 | 無題 折川知佳（郡山市）
- 10 | じゃらじゃら 佐久間宏+歴代支援員
(本展では展示されず)

第2回福島県障がい者芸術作品展
きになるひょうげん 2018
会期 2019. 2/2 - 3/10

社会福祉法人 安積愛育園 はじまりの美術館
〒969-3122 福島県耶麻郡猪苗代町新町 4873
TEL / FAX 0242-62-3454

2 ヘルルボニー 想像から福祉は生まれる

はじまりの美術館の「きになるひょうげん 2018」では、きになるものがもうひとつ見つかった。ヘルルボニーという福祉実験ユニットが美術館とコラボし、障害のある人たちの作品を使って制作したTシャツだ。プロダクツも、紹介パネルも、「は？ ヘルルボニーって？」と思っちゃうユニット名も、いい意味で力が抜けていて、それでいてデザインが洗練されている。きになった私たちは、ヘルルボニーが事務所を構える東京を目指した。

株式会社ヘルルボニーは、自閉症の兄を持つ、松田文登・崇弥兄弟が中心となって設立された会社。二人の地元である岩手県花巻市と東京の2箇所のオフィスを拠点に、障害のある人たちのアート作品を使ったプロダクツブランド「MUKU」や、アート作品を工事現場の仮囲いに採用する「全日本仮囲いアートプロジェクト」などを企画・運営している。

同社の社長、双子の弟の崇弥さんは「障害の世界は『できないことをできるようにする』ことをゴールにしがちですが、今できることをもっとできるように、そこにお金がついてくるように価値を高めていきたいです。彼らの障害は可能性であり、特別な才能なんです」と言う。その思いは、同社の「異彩を、放て。」というコーポレートスローガンにもよく表れている。

兄の文登さんはこう語る。「知的障害を理由に兄がバカにされたことがありました。けれど、バカにした奴らを怒るより、その外側のイメージを変えなくちゃいけないと思ったんです。家ではごく普通の兄が、社会に一步出れば偏見に晒されてしまう。だから社会のイメージを変える取り組みをしなくちゃ」と。

崇弥さんが「知的障害は、本人の生きにくさよりも、社会の偏見のほうが課題として大きい」と話すように、障害は、治療や訓練といった「本人の努力」よりも、常に社会の側に解決のための責が投げられている。本人の生きにくさを解消するには、当事者の外側にいる私たちが変わらなければならないということだ。だからこそイメージ変容をもたらす力のある「アート」や「デザイン」。とても納得がいった。

こうでなければならぬと主張するのでも、言葉で詳細に解説するのでもなく、目の前のナニカについて、想像させたり、考えさせたりする力。つまり「きにする力」が、アートやデザインにはある。きになった瞬間、ゼロから1が生まれる。これを描いた人は、どんな人だろう。どんな思いで、この作品は描かれたのだろう。そう考えた瞬間、すでに「福祉」は生まれているのかもしれない。

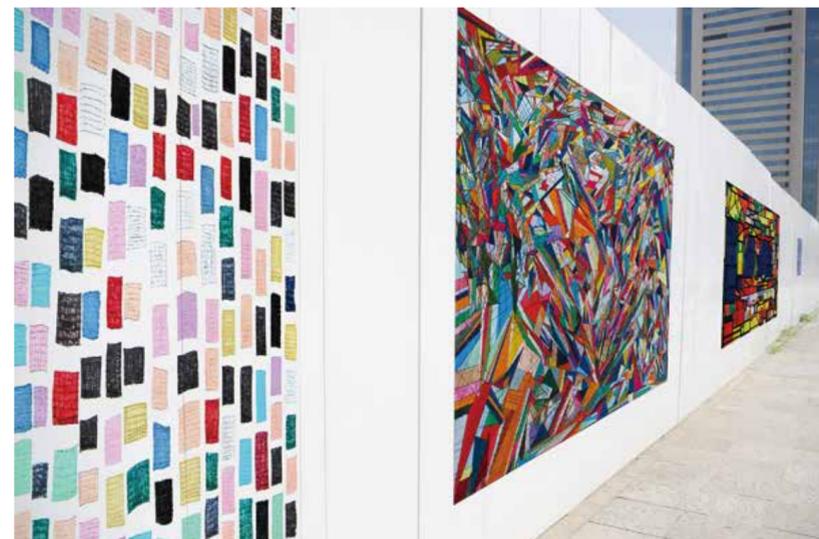


P5
1
2
3
4

- 1 | はじまりの美術館とのコラボ商品は美術館で販売中
- 2 | 社長を務める弟の松田崇弥さん、副社長で兄の文登さん
- 3 | 紳士洋品の老舗「銀座田屋」とコラボした MUKU のネクタイ
- 4 | 障害のある人たちの作品を使った仮囲い

株式会社 ヘルルボニー
<http://www.heralbonny.com>

MUKU
<http://muku-official.com>



いわきで出会った ナチュラル・ボーン・ アートたち



猪苗代と東京をめぐり、なんとなく「きになる」のコツをつかんだ私たち。これまでに会った作品たちを改めて見返すと、それらはどれも、多くの人に見られたいとか、芸術的な評価を受けたいと思って作られたものではなく、息をするように、そうせざるを得ないから作られたものだと気づく。いわば、社会的な価値や評価「以前の」作品たちなのだ。

それらは私たちに突きつける。私たちは、社会的な評価、意味、価値といったものをあまりに問い過ぎているのではないか。なんの役に立たなくたっていい。なんの意味も役割もなくたっていい。認められなくたっていい。人は、生まれながらにして、そこにいて「表現」しているのではないかと。

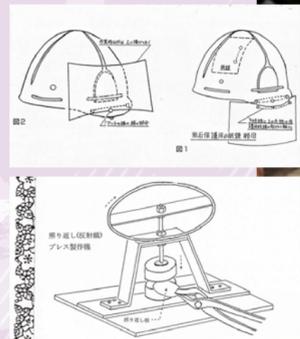


高木 徹 Toru Takagi

これでもかと緻密に書かれたひまわり畑。高木さんが復興を願って描いた渾身の絵本（下）の一部だ。圧倒された編集部はご自宅を訪問。そこで出会ったのは、お色気たっぷりのユニークなイラストたち。それも膨大な点数。「想像してイラストに起こすのが楽しいんです」と高木さんは語る。どこに発表するわけでもなく、自分で楽しむ為に描いている。まさにピュアなアートがそこにあった。（市）



発明の為にドローイング



渡辺為雄 Tameo Watanabe

昭和7年頃、白水の炭鉱集落で三輪車が流行。ねだっても買ってもらえない為雄さんは父のノコギリを引っ張り出して山に入る。苦心して木製三輪車を自作し意気揚々とまたがった。これが大評判となる。いつのまにかドチ車と呼ばれ、山ふたつ向こうの長屋でも流行した。のちに孫のために作ったものが現在「みろく沢炭鉱資料館」に展示されている。（江）



作者不明 Unknown

エヴァっぽい何かを表現した作品群。阿武隈山中某所に置かれており、この家の住人が作者と思われるが詳細不明。作り込まれたディテールに作者の表現欲求が多層的に圧縮されている。そうせざるを得ない何かによって吹き込まれる命。人形だからこそ、それが余計に強く感じられるのだ。（カジ）



「なんだこれ！」なアート、大募集します。
いごく編集部では、いわき市内にお住いの方の、ナチュラル・ボーンなアート作品を大募集しています。誰に見られるわけでも、賞を取るわけでもない。作家と呼ばれるわけでもないけれど、すごい作品、素敵な作品を探しています。ご存知でしたら、ぜひ編集部まで。



アートママ・DV 2017

4 生きていること自体、アート

Tatsumi Orimoto

折元立身

いごく今号の表紙に使わせて頂いた写真は、現代美術家の折元立身さんの作品である。折元さんから直接お話を伺ったのは、今年1月、いわきアリオスで開かれたアートパフォーマンスとトークのイベント。会場には、折元さんの母、^{おだい}男代さんの介護生活を作品化した「アート・ママ」シリーズの写真が展示され、渾身のトークのあとには、「パン人間」のパフォーマンスも繰り広げられた。折元さんの作品、言葉、すべてが胸を打った。そしていつか、いごくの読者の皆さんに伝えたいと思っていた。今号は「アート特集」。ようやくチャンス到来。イベントを主催したライフミュージアムネットワーク実行委員会の協力を頂きトークを文字化。珠玉の言葉たちの、その一部を紹介する。

編集協力：ライフミュージアムネットワーク実行委員会



アートママ：スキューバダイビング+ピクニック 1997



いわきアリオスの企画で「パン人間」のパフォーマンスを行った折元さん。いごく編集長の猪狩(写真・一番左)もパンをつけてパン人間となった。忘れられないアート体験。



アートママ+息子 2008

おれは美術をやりたいくて芸大を受けた。7回受けた。でも7回とも落っこちて、予備校の先生が言うんだよ。折元君は学校を受験しても受からない。だってもう君はアーティストになっちゃってる。学校は基礎を教えるところだから行く必要がないって。それで兄貴のいるロサンゼルスを経由してニューヨークに行ったんだ。おれはラッキーだった。マンハッタンのソーホーにアートムーブメントができていた。もうアートの中心はパリじゃなくなってたんだ。ニューヨークには自由の雰囲気があった。

おれは油絵を描いてたんだけど、パフォーマンスがすごかったんだ。一番すごかったのはヨーゼフ・ボイスだった。ルネ・ブロックのギャラリーに行ったら、救急車がやって来て、扉が開いたら担架に担がれたボイスが画廊に運ばれて、そのあと、その画廊に狼を離して檻の中でボイスと狼が1週間過すっていうやつだった。やっぱり芸大に行かなくていいと思ったね。ニューヨークで本物を見た。どういう風にアーティストが育って行くのかを体験することができた。母のオダイちゃんくれた才能がびったりと合ったし、アクションを起こすことも合っていた。

芸術はね、理論じゃない。感性で感じて表現するものなんだから分かった。理屈でこれがないで、どういう意図かなんてことじゃない。「感じ」なんだ。ヨーロッパが筆でペインティングしているときに、ジャクソン・ポロックはドリッピングをした。描いてないだろって言われたら、描いてある、これがアートなんだって。だからおれだって言いたい。顔にパンくっつける。これが俺のアートなんだって。

そういう作品を作りながら、でもポクッと親父が亡くなって。オダイちゃんがいるわけ。お

れと二人になっちゃった。これからはそんなに外国いけねえなと思ったとき、ああそうだ、このお母さんをデイクアする、世話すること自体、この現実そのものをアートにすればいいんじゃないかって。タイミングよく銀座のギャラリーが、空いてる日曜日に使っていいって話が来て、おれは好きなように写真を撮ったり、オダイちゃんにビッグシューズを履かせたりした。

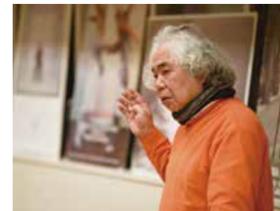
みんな死んじゃったけど近所のババアたちにタイヤチューブを乗けて撮影した作品もある。あの頃って公園に行くときタイヤとか自転車がよく落ちてた。ものをたくさん捨てたんだ。親が歳をとっても子どもは看ないしな。そういうことを絡ませたかったんだけど、そういう理屈はさ、周りが後からつけてくれるんだよ。やっていること全部理屈があったらちっとも面白くないじゃないか。

おれはね、生活自体、人間が生きていること自体がアートだと思ってるんだ。アートで大切なことは人間。だからこそ、現代美術は描くことより、人間、感性、コミュニケーションを加味したものになってきている。もちろん、ペインティングや彫刻はアートじゃないって言うわけじゃない。生活そのものがアートとして評価されてきているってことだ。お母さんの世話も、おれが生きていること自体もアートなんだよ。

おれの家、ゴミみたいのがいっぱいある。折元スタジオって言ってさ、そこでドローイングを描いたり、彫刻を掘ったりして、その前でババアが座ってケーキが何かを食ってる。その環境自体がアートだと思ってる。川崎市市民ミュージアムに、その家ごと持ってって展示したこともあるよ。

おれも22年ババア見た。何をすればいい？ってことじゃなくて、手をつないでる、そういうこと。理屈じゃないんだ。愛してるよって口で言うんじゃないくキスの方がいいんだよ。もちろん、親を看るって大変なことだよ。オムツ替えるのなんて本当にうんちしちやっつたのを替えるんだから。うんちをされると疲れるし嫌だけど、やっぱり手をつなぐってこと。おれにしてはちょっといいこと言すぎたな。

そういう感性、関係がアートだという時代に来て。モノの時代は終わりでさ。芸大失敗したりさ、貧乏したり、介護も大変だったし、お袋が死んでさごく寂しい。今じゃおれも独り暮らしだよ。でも、そういうことは全部後になってプラスになる。だから、皆さんとこういう風に会ったのもプラス。これから将来的に福島で作品を作る「ふくしまプロジェクト」も育てていきたいと思っています。皆さん、どうかよろしくお願ひします。



折元立身

1946年神奈川県生まれ。1969年に渡米、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アートで学ぶ。1971年にニューヨークに移って、ナム・ジュン・パイクとフルクサス・グループに出会い、パフォーマンスを開始。1977年に帰国後、国内及び世界各国で精力的に制作活動をつづける。2001年の第49回ヴェネツィア・ビエンナーレでも紹介されるなど、日本を代表するアーティストとして知られる。

あらたな



A L A T A N A

igoku NEWS

社会包摂を実現する“新たな”拠点が誕生

いわき市平荒川に、新しいいわき名所が誕生しました。その名も、ソーシャルインクルージョンベース「あらたな」。もともとあった焼肉店をリノベーションし、いわきで活動する4つの事業所・店舗が集まり、社会包摂を目指す新たな拠点として生まれ変わりました。ITを使った医療サポートを展開する株式会社HealtheeOne、障害のある人の自立支援を提供するNPO法人ソーシャルデザインワークス、引きこもり支援のNPO法人明日飛 子ども自立の里、そして、コミュニティ食堂「いつだれkitchen」（NPO法人布紗が運営）が入居しています。

社会包摂（ソーシャル・インクルージョン）とは、社会的に弱い立場にある人々を、排除や孤立から守り、社会の一員として支え合う考え方のこと。

医療や福祉、食に関わる企業が同じ場所で事業を展開することで、情報交換や連携を促し、地域の小さな声に寄り添っていくという狙いがあります。その「包摂」の大きなきっかけとして期待されているのが、コミュニティ食堂「いつだれkitchen」です。いつでもだれでも安価にご飯が食べられ、地域の余ってしまった食材も、一人ひとりの悩みごとをシェアしようというのがコンセプト。福祉の事業所が入っているため、困りごとや悩みごとがリアルタイムで支援につながるのもポイント。現在、毎週木曜日を試験営業日として稼働中。地域の母ちゃんたちが作るお惣菜でお腹を満たしてください。食材の寄付などもお待ちしております！



現在の入居事業所
株式会社 HealtheeOne
NPO法人 ソーシャルデザインワークス
NPO法人 明日飛 子ども自立の里
コミュニティ食堂「いつだれkitchen」
(NPO法人布紗が運営)



いつだれkitchenには、食材だけでなく雑貨や家具なども集められる。写真の古時計は、内郷高野にあるデイサービスセンター「人生の里」から提供されたもの。店舗の内装の設計は、いわき市の一級建築士、小森潤さんにご協力を頂いた。食材提供や寄付は大歓迎。詳しくはこちらへ。

いつだれkitchen

福島県いわき市 平荒川字桜町 1-1 あらたな内
電話：080-3145-9582 (なかさき)



いごくフェス 2019「極彩色」開催決定

3回目となる生老病死の祭典「いごくフェス 2019」が、8月31日、9月1日の2日間に渡って開催されます。いわきアリオスを会場に、初日の「ソトフェス」、2日目の「ナカフェス」にプログラムを分け、「ソト」では音楽や伝統芸能のステージ、食のブースなどが展開、2日目の「ウチ」では、演芸や漫談に加え、昨年に引き続きVRの体験やポートレート撮影などが行われます！！

今年のテーマは「極彩色」。極彩色とは極楽浄土を表すための、鮮やかな色のことを指します。人が本来持っている極彩色の色を、薄めることも塗り替えることもなく、あるがままに出すことのできる社会の方がいいよね。極彩色っ

て、死後の世界の色彩であるだけでなく、むしろぼくらの社会のありようそのものじゃね？ というようなことをみんなで考えてみたくて、このテーマになりました。

全国津々浦々、素晴らしいフェスは多かれど、いごくフェスでしか味わえない空間、体験、現場があちこちに広がるはず。アーティストやパフォーマーのラインナップも出揃ってきました。この顔ぶれが並ぶフェス、なかなか他じゃ見られません。さあさみなさん、8月31日と9月1日は、今から予定を空けておいてください。そして当日は、みんなで、それぞれの極彩色を見せ合いっこしようじゃありませんか！

出演者&プログラム (6/10現在)

8/31 Sat -ソトフェス- 平中央公園

ステージ：んまつーぼす、ミドリノマル、盆踊りズ ほか
出店：ピア博いわき、ちょうたら、ピストロアンティカ ほか

9/1 Sun -ナカフェス- いわきアリオス

松原タニシ、ロクディム、毒蝮三太夫、スナックらん、VR体験会、平間至 シニアポートレート撮影会 ほか

最新情報は、いごくのFacebookページをチェック！

igoku Fes 2019 8/31 Sat - 9/1 Sun



ありがとう ケーシー高峰師匠

4月8日、日本が誇るエロ漫談家タレントのケーシー高峰師匠がこの世を去りました。昨年9月に行われた「いごくフェス」では、体調不良のなか、10分余りでしたが最高のパフォーマンスを見せてくれたケーシー師匠。そろそろ次のいごくフェスのオファーに行かねば、と思っていた矢先の訃報でした。

ケーシー師匠には、表彰式のプレゼンターとして、本公演で芸を披露して頂くタレントとして、過去2回開催した「いごくフェス」にご出演頂きました。打ち合わせからサービス精神旺盛で、ウケ狙いの小噺やギャグばかりでほとんど打ち合わせにはなりません。私たちにに対するサービス、気遣いだったのか、もともとふざけていた人なのかはわかりません。ただ、ケーシー師匠と過ごす時間のなかには、常に「笑い」がありました。

2回目のいごくフェスのときは奥様同伴での打ち合わせでした。呼吸のために鼻にチューブを付けた状態だったので正直難しいかと思いましたが、「呼吸が苦しいから、リハなし。本番前に会場入りして、舞台も15分ぐらいで」という条件付きで出演頂いたのです。あの本番での鬼気迫る漫談。あの場に立ち会えたことが、私たちの誇りです。

私たち「いごく」は、いわき市に暮らす方たちが、自分が選んだその場所で、できるだけ最期の瞬間まで過ごすことができる地域をつくることをミッションとしています。ケーシー師匠は、自ら望まれていわきに移住され、震災や原発事故を共に経験し、私たちに笑わせてくれ、勇気づけてくれ、健康の大切さを伝えてくれました。限界まで舞台上がり、私たちに鼓舞して下さいました。あなたは、私たち「いごく」の精神を誰よりも体現する方でした。だからもう少しだけ、一緒にいたかった。もっと一緒に、笑いたかった。

ケーシー高峰師匠、本当にありがとうございました。あなたから笑いの種を受け取った者として、これからも、笑いとエロと健康と愛を、このいわきで育てていきます。愛と敬意を最大に込めて、グラッチェ。



いごく人のコーナー

左ページで紹介している「あらたな」に、毎週木曜日限定で、いごく編集部上荒川分室が開室されるヨ。いつだれkitchenのテスト営業日が木曜日なので、ごはなが食べただけなんだけど。アシスタントの森亮太が在室するヨ。見かけたら声をかけてあげてネ！



編集後記

今回のアート特集で気づいたこと。人は本来ただそこにいて表現しているということ。そして、障害と言われるものだって、なんでもらうって、これもありじゃねって面白くなって見ると、逆にその人本来の姿に近づけてしまうこと。いごくは「介護福祉」のメディアです。アート特集、しつかり福祉特集でもありました(理)

紙のいごく2019年度春号
2019年6月30日発行

igoku 編集部
編集長=猪狩 徹 / プロデューサー=渡邊 陽一 / エディター=小松理 慶 / デザイナー=高木 之助 / ビデオグラフィアー=田村博之 / ライター=江尻 浩二郎 / イベントプランナー=宮本 英実 / アシスタント=森 亮太
発行=いわき市地域包括ケア推進課 印刷=株式会社 植田印刷所

いわきでいごくで死ぬ人たちのウェブマガジン「いごく」 <https://igoku.jp>